



FRIENDS
WITHOUT A BORDER

*Voice
of friends*
2021 Annual Report
年次報告書



Compassionate care

すべてのことに思いやりの心を持って対応すること
どんな患者さんも我が子と思うのと同じように接すること

それが当団体の考えるCompassionate careです

子供たちに対する医療行為においてのみならず

当団体に関わるすべての活動は

Compassionate careの信条に基づいて取り組まれています

2年間にわたる新型コロナウイルス拡大防止対策としてのラオス国ロックダウンの中、ラオ・フレンズ小児病院開院7周年の時期、一月末に病院を訪問しました。この旅の目的の一つは2014年にルアンパバーン保健局と交わした契約の延長と将来のラオス保健省への運営委譲についての対話と確認でした。ちょうど最初に交わした契約の中間経過報告の時期であり、保健省、外務省から副大臣はじめ10数名の役人方々がルアンパバーンに来られて、県保健局の会議場においてラオ・フレンズ小児病院の運営状況を報告しました。

今回嬉しかったのは、医療、看護、総務それぞれの部署の活動をパワーポイントを使って状況報告を担ったのは3名のラオス人スタッフだったことです。

以前まではこのような重要な役目は外国人リーダー達が担っていたのですが、昨年からのロックダウンによって外国人リーダーの出入国がままならず、しかしその間も病院の運営は止めることができないため、自然発生的にリーダーの資質を持つラオス人スタッフが自立し始めたことをきっかけに「ラオス人によるラオス人のための小児病院」を自覚し始めたことでした。

さらにその夕方、政府関係者を招いて病院のリーダー達との懇親

ディナーの席で、この数ヶ月間に昇進した16名のラオス人スタッフ宛の任命・感謝状を手渡された時、7年間の彼ら彼女の努力の重みを感じました。総勢70余名を率いる看護部長；病院初めての部長職、にマリー・チッタバイ氏はじめ、各部署のマネージャーが15名。

これはまさにラオ・フレンズ小児病院現地化の大きな一步といえることでしょう。

新しく任命された部長、マネージャー諸氏の努力と、彼らをここまで教育してきた外国人リーダー諸氏に敬意を表します。

またほぼ2年間にわたって対面が叶わないにも拘わらず、私たちフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの理念とビジョンを信用して支援を続けてくださった皆様に心より感謝いたします。

井津 建郎

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー
創設者



2020年に引き続きコロナの影響を受けた2021年となりました。ラオスでの感染者数は2021年に入って一気に増加し、2020年3月に実施されたロックダウンよりもさらに厳しいロックダウンが行われることに。店舗はシャッターを閉め、夜間の街頭も早い時間に消灯されて、人の移動が制限されました。また、街中の各所には警察官が人々の通行をチェックするテントが設置され、私たち医療従事者は、許可書を提示して通勤をする日々が続きました。

院内でも、入院患者さんとそのご家族や、スタッフにまで感染が拡大。勤務スケジュールの調整に追われました。また、日中は35°Cを超える病棟でキャップ、ガウン、マスク、手袋といった予防衣を付けての勤務が必須となり、まるでサウナスーツを着ながら働いているかのような状態です。スタッフの体力消耗は著しく、身体的、精神的にも疲労が重なる状況が続きました。

私が担当する訪問看護では、ロックダウンにより訪問回数を最小に抑えながらも、どうしても気がかりな患者さんに限って訪問を継続しました。保健局からの許可書を持参し、郡や村の入り口に設置されているチェックポイントで説明し、都度、通過許可を得なければなりません。そのため、患者さんの家へたどり着くまでにかかる時間

は大幅に長くなってしまいました。ラオスの感染状況は今現在も高止まり状態が続いておりますが、立ち止まっているわけにはいきません。時間は前にしか進まないことを改めて実感し、その先にあるゴールを目指していくことを院内みんなで考えることに努めています。

2021年11月には新しい院長であるトマス・ブルーン医師が着任しました。また、小規模のチームをまとめるラオス人リーダーの中から各部署をまとめるマネージャーを選出し、新たなステップへ移行する時期となっています。将来のハンドオーバーへ向けて、新しいマネジメントの態勢を築く土台としての2021年であったように思います。

日々の診療をしながら病院としての自立を進めることは容易なことではありませんが、'Brienにゴールを達成することを目指して行きたいと思います。

赤尾 和美

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
代表





医療

ラオス

コロナの影響は相変わらず大きく、ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)にも大打撃がありました。院内での感染を防ぐため考えうる対策は講じていましたが、病院スタッフ間でも感染が拡大。外国人スタッフが自国への帰国を余儀なくされ、外国人ボランティアも入国できない状況下で、残されたスタッフへの負担が大きくなってしまいました。コロナで落ち込んでいた外来患者数が回復傾向に転じたこともあり、非常に多忙を極めた年になったと言えます。外来病棟はコロナの最前線にあり、来院者がまず訪れる場所であるため、院内にあったトリアージのデスクを受付の外に設置するなどして対応しました。入院病棟と新生児病棟では患者さんおよび付き添いのご家族がそれぞれにPCR検査を受ける必要がありますが、結果が出るまでの2日間、細かくエリア分けして滞在してもらうなど、細やかな配慮が必要でした。現在34床ある入院病棟は、コロナ前と変わり、今ではラオス人スタッフが主導しています。院内ではいくつかの増改築もありました。重症病棟の新設、外部倉庫の新設などです。また、クラウドファンディングREADYFORを通して得た支援金をもとに着手した、授乳室の建設も完了しました。

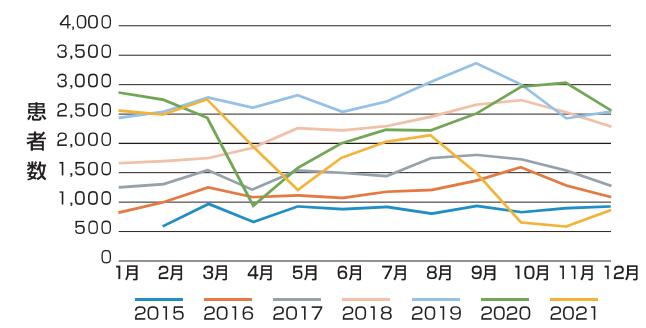


- ジュニア医師による胸腔ドレーン挿入の手技を、シニア医師の指導を受けながら成功させることができました。
- 発達・障がい児クリニックでは、未熟児、発達遅延、自閉症、ダウン症、脳性麻痺、脳炎後遺症、外傷性脳損傷などの診断とケアを行いました。コロナ禍にありながら93人の新規患者さんを受け入れ、既存の95人の患者さんのフォローアップも行いました。
- セラピーチームは、理学療法士2人、長期ボランティアの作業療法士、チャイルド・ライフ・セラピストがチームを組むことになりました。
- 放射線科／画像診断科にCアームユニットを導入。複数の画像や動画を撮影できるようになりました。生物学チームとITチームの協力を得て、デジタル画像保管システムの活用も可能に。これは遠隔診断や遠隔相談などに活用することができます。
- 検査科では新たに、尿分析等の専門的な検査ができるようになりました。

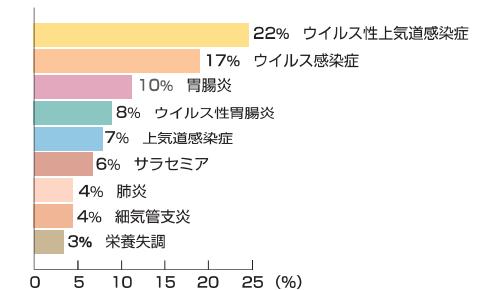
外来患者総数：12,204人
入院患者数：2,270人
新生児患者数：589人
救急患者数：9,634人
手術件数：955件

※のべ人数

ラオ・フレンズ小児病院 来院患者数



来院患者の傷病の割合



スタッフ紹介

将来的に現地化を目指しているラオ・フレンズ小児病院(LFHC)では、
ラオス人のリーダーが次々に誕生しています。
各チームのリーダー＝マネージャーになったスタッフを紹介します。
ラオスでは、初対面で名乗る時もニックネームを言うのが一般的で、本名をずっと知らないままのこともあります。
通り名のあるスタッフは、そちらの名前で覚えてください。

●メンテナンスマネージャー／

ニランドン・リヤンパチャン(ドーン)

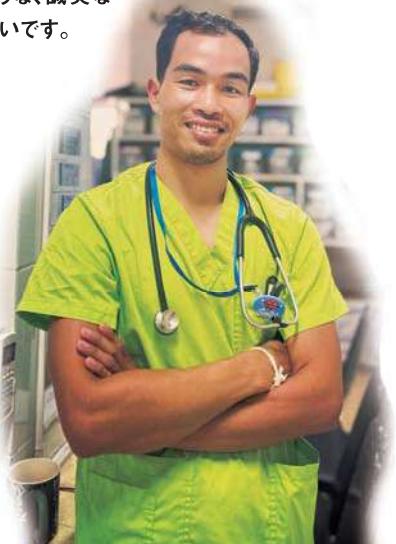
みんなからはドーンと呼ばれています。LFHCに勤務して2年が経ちました。院内設備のメンテナンスをはじめ、庭師やセキュリティチームの管理も行っています。責任感の強さが長所だと思っているので、その性格を活かしてチームに貢献したいです。チームの絆を強固にできるよう、一生懸命に働いています。



●入院病棟看護マネージャー／

ソムチット・ブンナポン

LFHCで看護師として働き始めて7年が経ち、今は、入院病棟の看護マネージャーとしてチームをまとめています。個人のスキルはもちろん大切だけれど、それ以上にこの職場ではチーム力が重要だと思います。時間を守ること、業務に集中することなど、当たり前のことをしっかりこなすことが問題解決への近道ではないでしょうか。誰にとっても良いお手本となるような、誠実なリーダーになりたいです。



●重症病棟看護マネージャー／

ソンポン・ラオ

勤務して7年弱です。いつもおだやかでいたいと思いますし、LFHCの理念である「質の高い心のこもったケアを提供すること」は常に心がけています。チームをまとめる立場になったので、患者さんだけでなく、スタッフも支えていかなければと気持ちを引き締めているところです。何か問題があれば解決するための色々なアイディアを提案したいですし、次のリーダーを育成したいとも思います。それと、看護師としては、静脈注射が得意です(笑)



●検査科マネージャー／

アノウシン・ボンダラ(シン)

ニックネームはシン、検査技師です。LFHCに来てから、早くも6年以上が過ぎました。検査技師は各部署から届いたサンプルを分析することが主な仕事で、誇りを持って職務に当たっています。自分の強みは、コミュニケーション能力の高さと、複数の仕事にも同時に対応できる冷静さだと思っていますので、戦略的かつ民主的なリーダーになれたらいですね。理想的なリーダーを目指して、チームメンバーと一緒に頑張っていきたいです。



●小児科医および医療教育アシスタントマネージャー／

ソムチッタナ・ソウラレイ

LFHC開院時から医師として勤務しています。LFHCの一員であることは誇りであり、私の経験と知識をラオスの子供たちを助けることに捧げたいと思いながら、日々働いています。また、学生やスタッフをサポートし、理論と実践を教えるのも重要な仕事です。規律、忍耐、尊敬、品格、献身を持って、素晴らしいチームワークを構築したい。もちろん、スキルアップが前提です。貢献できる人材になれるよう、私自身も海外からの専門家の指導を受けながら、より励みたいと思います。



●外来診療棟マネージャー／

ケオ・シサイトング

病院設立時より、看護師として勤務しています。「患者さんを我が子のようにケアする」という理念にとても共感しているので、常に心に留めています。患者さんだけではなく、そのご家族も大切にしたいですね。そのためにも、チームはまず仲良くなればいいなし、どんなことにも協力しながら取り組まねばなりません。チームメンバーから尊敬され、誇らしく思ってもらえるようなマネージャーを目指して頑張ります。



●入院病棟アシスタント看護マネージャー／

ダリカ・シッティボン(ダリー)

ニックネームはダリーです。看護師として勤務して7年、私はこの病院が大好きです。役職をいただいたこともあり、忍耐強く、責任感を持って、これからも成長していくたい。思いやりと向上心を忘れてはいけないと思っています。患者さんを助けることはもちろんですが、リーダーとして、スタッフのスキルアップもサポートしていきたいです。



●医師および救急科マネージャー／

ブンマ・セングマニー(リー)

LFHCに勤務して約6年です。救急科は志望の部署でもあるため、そこでマネージャーとして働くことを誇りに思います。後輩医師たちの良きリーダーとなり、私の経験を伝えたい。自分では、仕事もテキパキこなすし、親切心も、リーダーシップも持ち合わせていると思っているのですが……どうでしょうね(笑)後輩たちに信頼されるリーダーでありたいです。



スタッフ紹介

●小児科医および医療エデュケーター／

アンカン・タッマセン（アン）

私はアン、勤務して5年の医師です。医療エデュケーターとして若いスタッフを指導する立場になりましたが、だからこそ、私自身もよりいっそう学びを深めなければと思っています。協調性があり、柔軟な思考ができるところが私の長所だと思っていますから、その特性を活かしたリーダーになりたいです。LFHCには臨床医としてスキルアップできる環境があり、得難いことだと感じています。



●看護部長／マリー・チッタバイ

LFHCができた時から勤務しており、今はすべての看護チームを統括しています。この病院は、とても特別な存在です。誰もが大切にされていると感じることができますし、皆が大きな家族の一員だと思えるのです。LFHCが掲げる「心のこもったケア」は、患者さんに対しても、スタッフに対しても向けています。これは非常に価値があること！私は、ここで働くことに情熱を抱いていて、チームを見守り、彼らの成長を感じることも大きな喜びとなっています。私自身がお手本となって、チームに活力を与えたいたいです。



●小児科医および外来診療棟マネージャー／

ソンポンケオ・サンツォク

LFHCで働き始めてから、あっという間に4年が経ちました。心のこもったケアと医療知識や技術の向上に努め、仲間と共に楽しく働ける人になりたいです。インフルエンザなどウイルス性疾患の流行時はチーム一丸となって診療に当たりますが、今はやはり、コロナの感染防御が大きな課題となっています。



●小児科医および新生児マネージャー／

ヴィライヴォン・センケオ（パー）

小児科医のパーです。LFHCには約6年前から勤めています。私が描くリーダー像は、豊かな感情と知性を持ち、公正な態度で、積極的に他者の意見に耳を傾け、励まし、支えとなるような人。せっかくチャンスをいただいたのだから、理想に近づけるように頑張りたいです。今は主に新生児病棟と入院病棟で働いていますが、将来的にはHAU(重症病棟)も担当できたらいいな、と思っています。



●救急科看護マネージャー／

シアンポン・オンサヴァット（レア）

開院当初から勤務しています。ニックネームはレアです。私が担当する救急病棟を、患者さんのための最良の場所にしたいと思います。より多くの命を救うこと、

心を込めて治療することを忘れたことはありません。また、マネージャーという役職に就いた以上、スタッフのやる気を引き出し、支えたいとも思います。みんなから好かれ、尊敬されるリーダーになりたいです。



●薬剤師リーダー／

タッサダリン・ラバボン（リンダ）

薬剤師のリンダです。2018年7月1日から、ここで勤務しています。薬剤師になるのが夢でしたし、子供が大好きなので、LFHCは私にとってやりがいに満ちた職場です。学び続けることを忘れず、常に新しい知識を得ようと努力する人間でありたい！チームをより良くするためにも。私は、忍耐力と責任感には自信があります。チームの要望に素早く対応できるリーダーでありたいです。



●手術室マネージャー／ヴァンディ・ション

LFHCに勤務して6年です。外科医の助手として、手術室の様々な仕事をこなしています。手術で使用する物品や機器の洗浄・滅菌から管理、手術スケジュールの調整・管理などなど。あらゆる部署と連絡を取り、特に外科医とは密に連携を取って手術に臨みます。患者さんとご家族に安心してもらえるよう、包帯交換をしながら気さくにおしゃべりをしたり、問題解決の橋渡しをしたりするのも大事な仕事の一つ。チームで力を合わせ、最善を尽くしています。



●入院病棟マネージャー／ドーケオ・ボウアバオ

LFHCの小児科医として働き始めてから7年以上になります。病棟で患者さんを診て、体調や病状の経過を管理するのが主な仕事ですが、医学生や小児研修医へのトレーニングも担当しています。遠慮なく意見を言い合える環境を作り、チームで治療方針を考えたり、議論したり、共に学びながら、次のリーダーを育てることもあります。医療サービスの質の向上や方針を考える、病院のエグゼクティブチームにも属しているので、将来のLFHCを支えられるよう頑張ります。



●栄養士マネージャー／

ブンマーク・ポウムシー（トゥーン）

ニックネームはトゥーン、約7年前から栄養士として勤務しています。院内にとどまらず、訪問看護など院外での活動もあり、各部署との連携も大切です。患者さんのご家族から直接、相談を受けることもありますし、栄養学の知識のほかに、親しみやすさやコミュニケーション能力も求められる仕事だと思います。リーダーとして責任感を持ち、頼りがいのある人になりたい。患者さんの役に立てるように、もっと学ばなければいけませんね。





院内スタッフはもちろん、国内の医療従事者にも研修やトレーニングを実施し、国全体の医療レベル向上に貢献しています。

教育

ラオス

教育や研修においてもコロナの影響は多大で、昨年同様、プログラムの一部を変更せざるを得ませんでしたが、オンラインと臨床を組み合わせ、プログラム内容を損なわないように実施することができました。

医師教育は、講義の受講はもちろんのこと、それ以上に臨床でのトレーニングが重要視されます。これは、先進国を含む多くの国で基本とされている医療教育のスタイルです。ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)でも、実務経験を通した能動的トレーニングを、外国人医師の指導のもとで進めることができました。

看護教育は、より進化した研修プログラムを構築。ラオス保健省や保健科学大学のガイドラインに合わせ、ラオス人が主導する形で進めることができたのも大きな成果です。

英語教育はレッスンを追加し、週1回だったものを2回にしました。各自でアプローチできる自習用のツールも採用し、より充実したプログラムになっています。

最も大きなトピックは、新たにバーチャルプラットフォームを導入したこと。ここには学習に必要なすべての資料を所蔵しており、スタッフが好きな時間に自分のペースで、学習状況を確認しながら学ぶことができます。運用が始まったばかりですが、今

後の成果に期待が持てそうです。

なお、外部の他病院でも機会に応じてLFHCから様々な研修を提供しており、医療者のレベル格差や、都市部と地方との健康格差をなくすように努めています。



- 小児科医認定3年コースの臨床研修を実施しました。
- 病棟回診にて、診察方法、検査結果の分析、治療計画の立て方や家族へのカウンセリング方法など、各医療スタッフがスキルアップすることができました。
- 医師向けに月16時間の講義を、教室およびオンラインにて実施しました。
- 外国人の看護エデュケーターを迎えるました。
- 外国人の新生児看護スペシャリストを迎えるました。
- 栄養失調と診断された患者さん家族に対し、栄養士による栄養指導を行いました。
- 3つの郡立病院で、看護師と栄養士による経鼻経管栄養法のトレーニングを行いました。

「ラオス北部地域における小児栄養失調に対するケアの改善」プロジェクト

栄養失調のケアの質を向上させることを目標として、2018年に公益財団法人日本国際協力財団の「国際協力NPO助成」に採択され開始した3年プロジェクトは、2021年3月に無事終了しました。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大きく受け、計画の変更もありましたが、海外にいる医療専門家によるオンライン栄養教育を開始し、スタッフの専門知識の強化を行いました。その結果、スタッフは着実に成長し、的確に栄養失調を見つけ出してケアへつなげられるようになりました。

また、LFHCの栄養士が地域の保健センタースタッフやメディカルアシstantの学生に栄養教育を行うことで、LFHCが幼少期栄養失調の研修を行う施設として認識されることにもつながりました。

ラオスでは、栄養失調の原因が単なる食糧不足にとどまらず、文化的な習慣や経済的障害、健康リテラシーなど多岐に渡るため、ラオス政府や他機関などとの連携強化が今後の課題となります。



予防 OUTREACH

ラオス

アウトリーチプログラムの主な活動は、院内にいる患者さんがスムーズに退院できるようサポートし、退院後も健やかに過ごせるようにフォローアップを行うことです。

2021年もコロナ禍のロックダウンによる影響で、訪問看護の活動は大きく制限されてしまいました。前年に引き続き、特に気がかりな患者さんに限り保健局から許可を得てやっと訪問することができる、という状態が続いています。しかし、この経験がスタッフにとっては新たな学びの機会となりました。個々の患者さんのニーズや訪問の優先順位を、的確に評価する力を延ばすことにつながったからです。訪問看護に際してはまず、患者さんごとにフォローアップの目標を設定し、その目標を達成するためのケアプランを立てます。目標が達成された折には“退院”（=訪問看護終了）となりますが、日々の業務に追われる訪問すること自体が目的になってしま



栄養失調の訪問ケース

ラオスでは、小児の栄養失調は珍しくありません。ご家族が気づいていないことも多く、病気として認識されにくいとも言えます。しかし、栄養失調による成長への影響は多大です。時には病気の要因となることもあります。決して看過してはならないため、アウトリーチチームが指導したり、経過観察を行ったりすることが重要になってきます。

訪問看護に出向いた村で、栄養失調の子供をみつけるのもよくあるケースです。先日も、栄養不足により筋力が劣っている子供にたまたま出会いました。まず、その場で

まい、毎回の評価が適正にならないまま惰性で訪問を続けるケースが発生してしまいかがです。しかし、コロナ禍で活動制限ができ、必然的に訪問の優先順位をつけなければならなくなつたことで、誰にどんなニーズがあるのか、優先順位は誰が高いのかという視点で計画を立てなければならなくなつりました。

また、時には新たな患者さんが急に飛び込んでくることもあります。せっかく立てた予定や計画をとっさに変更しなければならないこともあります。様々な状況における判断力、見極め力が付いた1年でした。たとえ困難なことがあっても、毎年、何かを学び成長していることを実感しています。

- 年間訪問の件数：309件
- 1年間の総走行距離：21,988km
- 栄養失調、脳性麻痺、HIV感染症、ガン末期、難病、社会的な問題を抱えた患者さん、死亡後の家族のために訪問看護を行いました。
- Compassionate careに基づく看取りのケアについて考え始めました。
- コロナ禍2年目になりZoomやメッセンジャーを使ったオンラインミーティングが日常の中に溶け込み、アウトリーチ部長である赤尾看護師の長期帰国中も問題なく情報共有をすることができました。

きる範囲のチェックを行ってご両親に状況を説明し、食事として与える栄養パックを支給。さらに、LFHCの発達・障がい児クリニックに通う事を勧めました。クリニックでは筋力強化を図るプログラムも実施しているので、栄養面でのサポートに加えることで、より的確かつ充実したサポート体制を取ることができます。こうしてまた一人、指導と経過観察の対象となる子供が増えました。そして、対象者一人ひとりに合った最適な方法を考え、寄り添っていくのがアウトリーチの使命です。

PREVENTION



アウトリーチでの活動例

ラオス

看取りへの取り組み

どんなに手を尽くしても、残念ながら亡くなってしまう患者さんがいます。院内で亡くなった場合、民族によってはそのしきたりにより遺体を連れて帰れず、病院近くで埋葬してから帰宅します。また時には埋葬自体にも付き添えず、隣接する県立病院の埋葬担当スタッフへ遺体を引き渡し帰宅することもあります。

小さな赤ちゃんの場合、埋葬担当スタッフは、ご遺体をダンボール箱に入れて搬送します。きれいな箱ばかりではなく、角が潰れていったり汚れていたりすることも。文化や考え方の違いがあるとはいえ、その箱を目にするたびに心が苦しくなり、スタッフに相談してみることにしました。その結果思いついたのが、ダンボール箱をラオスのしきたりに沿ったお棺にアレンジすることです。箱の外側にラオスのお葬式でよく使われる色の紙を貼り、お花やハートのデコレーションを施します。

こうした文化的な影響が大きい事柄には、専門家として指導する立場の外国人であっても、自分たちがよいと思う方法をそのまま押し付けないようとも注意しますが、これはいいアイデアだと、現地スタッフからもお墨付きをいただきました。

できればお棺は使わずにいられたらよいけれど、使う時はせめて、家族の心痛を少しでも和らげたいと思います。看取りという言葉は日本独特的言葉ですが、ラオスの文化にあった看取りケアを考えていきたいです。

Compassionate care
= 質の高い心のこもったケア

身体に障がいがあり、嚥下することが困難な患者さんのお話です。こうした患者さんに対しては、鼻から挿入した管から栄養補給を行います。これは退院後も家庭で行つてもらわねばならず、入院中に、流動食の作り方、栄養液の注入の仕方をご家族に学んでもらいます。そして、退院し自宅に帰った後も家庭で順調に栄養補給ができるか、確認を兼ねた訪問看護を行います。

Aちゃんもその一例で、訪問看護で定期的にフォローアップしています。訪問時には体重の増加で栄養補給がうまくいっているかどうかをチェックしますが、ある日の訪問ではAちゃんの体重が減っていました。鼻からの管も抜かれており、明らかに栄養摂取が不足している様子。お母さんにお話を聞くと、最初は「Aちゃんが管を嫌がるから抜いてしまった」と言っていたのですが、さらに聞くと少し困った表情で「流動食を作るためのミキサーが壊れている」と言うのです。ミキサーは流動食作りには欠かせない道具で、購入できないというAちゃんのご家族のためLFHCから貸し出していました。おそらくお母さんは、借り物のミキサーを壊してしまったと思い、言い出せずにいたのだと思います。

そこでさっそくミキサーをチェックしてみると、ミキサーではなく、ヒューズの故障だということが判明しました。これならヒューズを変えれば修理ができると判断した訪問看護スタッフは、早速ヒューズを買いに行き、修理完了。ミキサーは正常に使えるようになりました、お母さんの顔にも笑みが見えました。

訪問看護ナースのスキルは医療だけではありません。目の前の患者さんに影響を与えているものは何かということを、一步下がって見つけられる目と心が必要です。そして、これこそが、フレンズが大事にしているCompassionate careなのです。



アンコール小児病院への支援

カンボジア

アンコール小児病院(AHC)は1999年に当団体が設立し運営していましたが、当初の予定通り現地化を果たし、2013年からはカンボジア人による運営となりました。現地化後も私たちは、助成事業としてAHCの教育プロジェクトと地域保健医療プロジェクトに支援を続けています。



©Angkor Hospital for Children

【教育プロジェクト】

昨年同様、コロナによる影響が多大な1年でした。カンボジアでは2月に爆発的に感染が拡大し、感染者数は9月中旬には10万人に達する事態に。10月末までロックダウンが続き、国内の教育機関も閉鎖される状況にありました。それでもAHCでは教育活動を継続し、できる範囲での高い成果を上げることができました。

AHCスタッフへの教育

- 繙続的な医療教育に、のべ3,680名が参加。
- 繙続的な看護教育に、のべ4,845名が参加。
- 看護プロセスに関するオンライン教育に、のべ59名が参加。
- スキルアップを目的とするカンボジアの全国会議に59名が参加。
- 國際会議に36名が参加。
- 感染予防に関するワークショップに27名の非医療従事者が参加。別途オンラインで開催された同ワークショップには41名が参加。
- 小児腎臓疾患に関する会議に8名が参加。
- 病院のトレーニング管理に関するオンライン授業に23名が参加。
- 看護と女性の健康管理に関する国際会議に看護師2名が参加。
- アジア呼吸器学会に医師2名が参加。
- 腫瘍や呼吸器などの長期慢性疾患に関する研修(1年間)に看護師5名が参加。同じ内容を含む専門研修に医師16名が参加。

医療学生への教育

- 国内の大学から医学生を受け入れ、38名がインターンシップを修了。

外部医療従事者への教育

- 公立病院の医師1名、個人病院の医師4名を受け入れ、新生児室、小児集中治療室、入院病棟にて研修を実施。

【地域保健医療プロジェクト】

コロナ感染拡大によるロックダウンの影響で、農村部に出向くことが困難な状況が続きました。政府の外出禁止令が出た時には活動を中断せざるをえず、全く動きが取れない時期もありました。反面、6ヶ月に渡り拡声器を使って新型コロナウイルスへの注意喚起を行うなど、これまでにない新たな活動を実施。状況に合わせてできることを考え、チャレンジできたことは、今後の活動への糧になるだろうと思います。また、パンデミックが起こった今だからこそ、病気予防や衛生の知識はますます重要となり、この活動の意義を改めて実感させられました。

- シエムリアップから約86km離れた医療へのアクセスが困難な地域=スレイスナム郡の、43の村(5つの自治体と2つの学校)で医療サポート等を実施。
- ロックダウンが解除され、規制が緩和された12月、392名に向けて学校での保健衛生教育を実施。
- 保健援助グループボランティアに向けて、応急処置等のトレーニングを実施。
- 栄養教育と料理のデモンストレーションを実施し、2,747名が参加。



©Angkor Hospital for Children

外来患者総数：38,631人

入院患者数：2,596人

救急外来患者数：10,656人

集中治療室患者数：993人

眼科患者数：9,444人

歯科患者数：19,100人

※のべ人数

2021年の出来事から

コロナ禍でも物語はいっぱい

ラオスのコロナ禍が長引いていますが、そんな中でも、たくさんの物語がありました。

写真は、コロナ病棟に入院中の妊婦さんから赤ちゃんを取り上げたところ。右の写真も同様で、これが4人目! マスクと防護服で見えないですが、みんな笑顔をしています(きっと!) 赤ちゃんを取り上げることで知り合うことになった妊婦さんご家族との出会いは運命ですよね。



患者さんの家族へ寄り添う

LFHCは小児病院です。ほとんどの患者さんは家族と一緒に入院生活を送ります。家族へのケアは、患者さんと同様とても重要です。写真左はカウンセラーがお母さんとお話をしているところです。新規入院した家族からは疾患の理解や、入院に際して困っていることなどを聞きながら良い関係づくりのための時間を作っています。右の写真は、訪問看護で長く関わっている患者さん家族ですが、家族の写真が欲しいというお母さんのために、パチリ。プリントアウトして

ラミネートで保護し、持って行きました。とても喜んでくれたことに、スタッフも喜ぶ。これが重要です! やってあげたんだという目線ではなく、家族を喜ばせたいと思うような感覚ですね。(けっこう上手に写真が撮れて私も満足(笑))



分包作成中!

タイトル通り、写真的スタッフはお薬の1回分ずつの分包を作っています。お薬を長期に渡り服用しなければならない患者さんがいますが、どうしても服用方法を覚えられなかったり、飲み忘れがあったり。そんな患者さん家族のためにどうすればいいかを話し合い、分包を作ることにしました。1回分ずつ朝用、夜用と分けて3か月分を分包しています。それを1週間ごとにまとめ、日付を付けてわかりやすく箱に詰めて……と、結構な手間がかかりますが、お薬の服用状

況をチェックした時に、「またちゃんと飲めていなかった」という家族のがっかりがなくなるように、せっせと作ります。どうすれば問題が解決するかと諦めずに考えることが、窗口としてのお仕事ですよね。



子供の笑顔のために

コロナ感染の拡大により、院内では感染対策の予防着で業務にあたりますが、表情も分からず、誰なのかもすぐに見分けがつかない時も多々あります。子供たちからするととても怖いだろうと思うのですが、その恐怖を少しでも和らげようと、スタッフたちも改めてCompassionate careの精神を發揮してくれています。忙しくても予防着がしんどくとも、そこに子供たちがいる限り子供たちの笑顔がひとつでも増えるように“スー! スー!”(ラオス語で頑張れー)です。真ん中の写真、わかりにくいのですが、泣き叫ぶ子にシャボン玉を作つてあげているんです。右は点滴を入れる時に注意をそらすためにスマホで動画を見せてています。



“おんぶ”から感じたもの

おんぶしてもらっているのがダオちゃんという患者さんで、おんぶをしているのがお姉ちゃん。ダオちゃんは手術待ちのために3か月も入院していました。足の骨が弱っているために自分で歩くことができません。そのダオちゃんを、いつもこうしておんぶして、移動のお助けをしていたのがお姉ちゃんです。

毎日見かけたこの“おんぶ”。見るたびに「寄り添うってこういうことだな」としみじみと眺めていました。もちろん車椅子もあるけれど、お姉ちゃんはおんぶを選んで寄り添っていた。おんぶって身を任せることですね。単に移動手段というよりは、信頼、愛情、安心、心丈夫、温かみ、慈しみなど

など、たくさんの感情が混ざったものがこの“おんぶ”から感じられました。

私たちが目指す Compassionate careのお手本にしたいなと思いました。



手作り野菜畠

院内では、食材を調達できない患者さん家族へは食材を配給しています。特にコロナ感染拡大によるロックダウン規制の発出中は、人の移動が制限され、家族が買い物に行くこともできませんでしたので、ほとんどすべての家族がこの配給を受けていました。

LFHCでは食育の一つとして、数年前から敷地内でオーガニック野菜を作っています。その野菜を配給に使い、コスト削減で健康にもよいといいう一石二鳥を実現。院内に一人いるガーデナーさんが、患者さんが喜びそうな菜っ葉、お芋、レタス、インゲン、カボチャなど種類も豊富に作っています。時には小さな失敗もあり、先日は、せっかく育てたオクラ

が患者さんたちに不人気だったということがありました! 土を耕すところから始まった野菜には、栄養にプラスしてスタッフの繊細な愛情もたっぷり詰まっています。



フレンズJAPAN 事務局の1年

2020年に続き、2021年もコロナ禍から抜け出せない困難の年となりました。しかしそれゆえ、コロナ禍における働き方に余裕ができたとも言えます。オンラインの活用をはじめ、つらい中にあっても、活発に活動ができた1年でした。

1月

オンラインイベント「カンボジア×ラオスの24年」開催
(株)ピース・イン・ツアーサンと一緒に、「ラオスとカンボジアをつなぐ、またりゆったりオンラインイベント第1弾」を開催しました。当団体の活動の原点であるカンボジアのアンコール小児病院（AHC）からピエクトラ院長のメッセージ、現在の活動地ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）院内ツアー、現地赴任中の赤尾看護師の活動などを動画で紹介しました。



2月

バーチャルランイベント「みんなで繋ぐ810(ハート)kmバーチャルラン」開催
ハート(心)にかけて810kmをみんなで走ろう!というイベントを開催しました。エントリーした人たちが個々に走ったり歩いたりした距離を申告してもらい、その総距離を日々集計。目標の810kmはあっという間に達成し、次なる目標、日本からラオスまでの距離4000kmもクリアするほどの盛り上がりとなりました。同時に募った支援金の半分は、助成事業として「NPO法人居場所づくりプロジェクトだんだん・ばあ」へ寄付しました。



3月

オンラインイベント「コロナ禍の子供たち」開催
東京・三鷹市で、様々な不安を抱える子供たちに安心できる居場所を提供する活動を行う「NPO法人 居場所づくりプロジェクトだんだん・ばあ」代表の加藤雅江さんをお迎えし、トークイベントを行いました。



NHK WORLD-JAPAN
『Side by Side』で
LFHCを特集

NHK WORLD-JAPAN の番組『Side by Side』がLFHCを取り材。番組取材チームは2週間にわたって現地に滞在、30分間の番組として編集し、放映してくださいました。

春期インターンとして
大学生2名が参加
3~4月の2ヶ月間、学生インターンとして翁慧美さんと長崎仁美さんが活動に参加してくれました。



5月

マンスリーサポーター募集
キャンペーンを実施(5~8月)
マンスリーサポーターを募るキャンペーを行なう、たくさんの方にご賛同いただきました。



8月

夏期インターンとして大学生2名が参加
8~9月の2ヶ月間、学生インターンとして上原礼さんと中島陽人さんが活動に参加してくれました。



9月

オンラインイベント「授乳室が繋ぐもの」開催
赤ちゃんとママ社編集部の佐藤加世子さん、NPO法人 クロスフィールズ共同創業者・理事の松島由佳さんをゲストにお迎えして、様々な視点から育児や授乳についてお話をうかがいました。

クラウドファンディングにチャレンジ
「安らぎと教育の場として、3x6mの授乳室をラオスの病院に作りたい!」を掲げ、8~9月にかけてチャレンジ。173人(代理購入含む)の応援を得て、目標の250万円を大きく超える310万円以上のご支援をいただくことができました。

11月

赤尾和美が「第56回社会貢献者表彰」を受賞
公益財団法人 社会貢献支援財団の「社会貢献者表彰」は、1971年に創設された伝統ある賞です。このたび、20年以上にわたる国際協力への功績が評価される形となり、喜びに沸きました。

12月

冬の募金キャンペーンを実施

1月末までの期間、患者さんケアへの支援を呼びかけるキャンペーンを行いました。患者さんケアとは、無料となる一般的な医療費には含むことができない様々な費用(専門医による診療費、外部での検査費、輸血費用、医療搬送に伴う交通費、治療用具、葬儀費など)を指しています。医療関連費用が多岐にわたることをご理解いただく、よいきっかけとなりました。



How to Support

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANの活動は、皆さまのご支援により支えられています。

支援方法をお選びいただけます

●正会員

年会費 個人12,000円
団体・法人30,000円
(年度ごとに更新・活動への議決権あり
・入会申込書あり)

●賛助会員

年会費6,000円(支払月より1年間)

●学生賛助会員

年会費3,000円(支払月より1年間)

●マンスリーサポーター

500円～自由に金額指定
(クレジットカードまたは指定口座より引き落とし)

●一般寄付(金額・回数自由)

※ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

※銀行振込や、インターネットからのカード決済も可能です。



皆さまの支援でこんなことができます

500円	医師や看護師用の使い捨て手術着1着分
1,000円	粉ミルク2週間分
3,000円	首都ビエンチャンへの患者さんの往復交通費1人分
5,000円	手術に使用する麻酔薬1回分
10,000円	1人の患者さんの入院費2日分
30,000円	院内薬局の運営費 (薬代+人件費)1日分

※1ドル=120円の場合

マンスリーサポーターって何?

マンスリーサポーターになると、決まった金額が毎月、ご指定の口座から自動的に引き落とされます。「継続的に支援したい」「小さな金額で無理なくコツコツと支援したい」「年会費の振り込みを忘れがち」といった支援者さんからの声にお応えし、誕生しました。500円以上の金額を、ご自由に決めていただくことができます。

<お申し込み方法>

■クレジットカード決済をご希望の方
右のQRコードもしくは以下にアクセス
https://congrant.com/credit/form?project_id=1658

■口座振替をご希望の方

フレンズ事務局までお問い合わせください。



こんな支援方法もあります

●本やCD/DVDを「ありがとうブック」に送付

家で眠っている本やCD、DVD、ゲームソフトを合わせて30点以上、宅急便で「ありがとうブック」に送ると、その買取代金が当団体に寄付されます。新品・中古は問いません。部屋を片付けて寄付につなげましょう。

<https://www.39book.jp/supporter/2095/>

●寄付型飲料自販機の設置

自動販売機でドリンクを買うと、その代金の一部が自動的に当団体への寄付になります。これは、コカ・コーラ ポトラーズジャパン(株)様と(株)伊藤園様が社会貢献活動として行っているもので、利益の一部が支援団体への寄付金となるシステムです。

この寄付型自動販売機を設置してくださるお店や会社を募集中! 自動販売機本体に当団体の名前や活動写真が使用された、オリジナルデザインの自動販売機となります。設置によるご負担は、電気代のみです。フレンズオリジナルの支援型自販機が、日本各地に広がることを期待しています。



●イベントを開催

当団体を支援するチャリティイベントの企画・開催を歓迎します。たとえば、ご友人とのランチ会やゴルフコンペの会費に支援金を上乗せする、学園祭やサークルのイベントで募金箱を置く、自分たちでチャリティライブを行うなど。団体紹介の資料等が必要な場合は、お気軽にご相談ください。

●健康ドリンクを購入

「お~いお茶」などで知られる飲料水メーカー(株)伊藤園様とのタイアップ企画を行っています。「伊藤園 健康体 契約企業専用サイト」<https://www.kenkotai.jp/shop/a/abbcT044/> このサイトでは優待価格で商品を購入でき、また、その売上の7%が当団体に寄付されます。「伊藤園 健康体」は、毎日の健康を積み重ねる良きパートナーとして、健康飲料や健康食品、サプリメントなどを扱っているオンラインショップです。健康増進を図ることが支援につながりますので、ぜひご利用ください。



●グラフィックデザインなどの技能や専門知識を提供

チラシやDMのデザインを担当してくださるボランティアを募集しています。他にも、専門的な技能や知識を活かしたボランティアをしてみたい方、どんどんお声がけください。

フレンズ関連書籍のご案内

赤尾和美著

「この小さな笑顔のために

～日本人ナースのカンボジア奮闘日記～

¥1,540(税込)

現在はラオ・フレンズ小児病院で活動する赤尾看護師が、アンコール小児病院時代に執筆した奮闘記。東南アジアにおける医療現場の臨場感だけでなく、カンボジアの人々の暮らしを眺めるような、紀行的味わいを感じることができる名著です。



宮本敬文写真集

「GIFT to children of Angkor」

¥2,750(税込)

雑誌や広告写真で注目され多くの有名人を撮影して作品を残し、周囲に慕われながらも夭折した宮本氏。生前、アンコール小児病院の活動に共感し、何度もカンボジアに足を運んで撮影した渾身の写真集です。

※これらの書籍は現在、書店等での取り扱いはございません。
ご購入希望の方は、フレンズ事務局までお問い合わせください。





ユニセフ「世界子供白書2021」より抜粋

	日本	ラオス	カンボジア
新生児死亡率	1人	22人	14人
5歳児未満死亡率	2人	46人	27人
妊娠婦死亡率	5人	185人	160人
平均寿命	85歳	68歳	70歳
家庭で衛生的な飲用水源を利用している割合	99%	85%	71%
家庭で適切なトイレ設備を利用している割合	100%	79%	69%

※新生児および5才児未満の死亡率は、出生数1,000人あたりの死亡数。

※妊娠婦死亡率は、出生10万人あたりの死亡数で。

当該時期に妊娠関連の原因により死亡した事例が対象。

令和3年 活動計算書

令和3年1月1日～令和3年12月31日

特定非営利活動法人 フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN

(単位:円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取会費 正会員受取会費	582,000	582,000
2 受取寄付金 受取寄付金	139,462,683	139,462,683
3 助成金収入 助成金収入	1,260,000	1,260,000
4 事業収益 普及活動収入 収益事業収入	35,000 3,700	38,700
5 その他収益 受取利息 雑 収 入	960 162,897	163,857
経常収益 計		141,507,240
II 経常費用		
1 事業費 (人件費) 給料 手当 法定福利費 人件費計 (その他経費) 支払寄付金 助成事業 医療施設運営・教育・予防事業 賃 備 料 水道光熱費 通信運搬費 広告宣伝費 旅費交通費 消耗品 費 印刷製本費 支払報酬 福利厚生費 保 備 料 支払手数料 リース料 イベント経費 【売上原価】 期首棚卸高 期首商品・製品棚卸高 計 仕 入 高 当期仕入高 計 期末棚卸高 期末商品・製品棚卸高 計 売上原価 計 その他経費 事業費 計	5,718,956 1,820,269 7,539,225 43,779,020 71,212,514 1,625,544 155,174 113,724 3,841,992 460,465 383,835 5,584 700,000 80,555 155,350 479,556 75,240 87,713 454,075 454,075 184,510 184,510 △ 636,825 △ 636,825 1,760 123,158,026 130,697,251	
2 管理費 (人件費) 給料 手当 法定福利費 人件費計 (その他経費) 賃 備 料 水道光熱費 通信運搬費 旅費交通費 消耗品 費 研 修 費 支払手数料 支払報酬 福利厚生費 会 議 費 雑 費 リース料 交 易 費 租税公費 その他経費 管理費 計 経常費用 計 当期経常増減額	1,805,990 569,530 2,375,520 513,336 79,693 174,717 68,118 299,855 21,720 613,067 110,000 43,420 7,870 48,287 23,760 156,607 996 2,161,446 4,536,966 135,234,217 6,273,023	
III 経常外収益		0
経常外収益 計		0
IV 経常外費用		
経常外費用 計		6,273,023 70,000 6,203,023 37,419,632 43,622,655

FRIENDS
WITHOUT A BORDER

Photo credit / Adri Berger

(認定)特定非営利活動法人

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-14-11 ヤマダビル6F
TEL/FAX:03-6661-7558 friends@fwab.jp www.fwab.jp



2021年度役員

代 表

赤尾 和美(看護師)

副 代 表

井津 建郎(写真家)

理 事

戴 波留美

高橋 大輔

(三光ソフランホールディングス(株)取締役

メディカルホットライン(株)代表取締役

(医)誠光会 ひかりクリニック 理事

(福)誠高会 さくらんば保育園 理事

竹地 春海

(中山身語正宗 参与、大本山瀧光徳寺 寺務長)

中小路 太志

堀 成美(感染症対策コンサルタント)

松島 彰雄(前代表)

渡辺 淳子

監 事

熊井 昌広

2021年度正会員

和泉 直子

(宗)泰宗寺

一乗 朋美

高橋 俊晴

大角 雄三

太刀川 雅子

大田 倫美

(株)ナース・ステーション

大塚 洋子

猪原 祥光

大松 誠二

(医)中野こどもクリニック

(株)岡興産

則包 哲

小川 直美

橋本 朋子

小澤 誠

平岩 町子

加藤 嘉哉

藤井 立秀

兼子 思

藤井 哲夫

熊井 貴美

松原 めぐみ

熊井 昌広

真弓 バラカン

(株)熊谷組

水谷 祐子

小山 達雄

メディカルホットライン(株)

Sisyphus(株)

(医)めときどもクリニック

(医)誠光会ひかりクリニック

渡邊 信子

関岡 俊二

